

春燈



10
月号

成瀬櫻桃子の句

地に落ちぬででむし神を疑ひて

自註現代俳句シリーズ『成瀬櫻桃子集』昭和五十二年

人は宿命を負ってこの世に生まれてくる。神は乗り越えられない試練を人にお与えにはならない。魂の透明度が高い人にはその人に見合った課題が用意されている。

長女的美菜子さんの障害を知られた時の先生の落胆は察するにあまりある。しかし神を疑うことは不遜である。ででむしは一条の光にすがりゆつくりと上に昇ってゆく。そこには再び神の光と温かさのあることを信じて。

鷹崎 由未子

成瀬櫻桃子の句

朧月違へし道をきてしまひ

自註現代俳句シリーズ『成瀬櫻桃子集』昭和五十二年

櫻桃子の俳句の道は厳しい原点からの出発であった。この作の頃、国は無謀な戦争の最中、家は母が女手に病の祖母との三人の暮しを支え、作者も苦学の中に病の身。国も作者も先行きは模糊として判らず、来た道も果して自分を裏切らなかつたか。その念が青年の苦悩として色濃く、素直に描かれて息苦しい。世に抗することに危険な時代、純粹な精神性が極めて高い作と読む。

中野英伴

西ヶ原日記 (二三)

鈴木榮子

敗戦日配給軍靴履きて聴く
本所・熊谷二度罹災して戦後の夏
向田邦子と生年月日同じ夏
四十以後の運は性格苔の花
縁日の華でありしよカルメ焼

開きては読み積んでは読みて曝書かな
送火焚く亡母の笑顔ありありと
生かされてさくさく崩す氷水
八月も末の宵宮の遠囃子
銀座七丁目八丁目十五番街盛夏
新涼の小函指貫イヤリング
体育の日スタートダッシュの腕の張り

〈特別作品〉
(抄)

草の花

橋本リエ

石垣にまだ日の残る鴨足草
濃紫陽花雲の重さを負ひにけり
つばくらや雨の匂ひの絵てがみ来
花苔に近寄りすぎて靴濡らす
古りに古る遺影の中のパナマ帽
姫向日葵帽子に挿してもらひけり
植込みにまぎれて咲きぬ夏あざみ
天主へと美男かづらの咲きのぼる
大花野弱気の虫を放ちけり
ひとにやや遅れて歩む草の花

軍 船

青
柳
雅
子

灯台の天辺めざすねぢれ花
陰祭潮騒ばかりさんざめく
炎昼や遅れ勝ちなる路線バス
滴りの砲台山へ登りけり
走り根の岩にかみつく日の盛り
うなさかに超弩級艦星流る
軍港てふ駅名廃す送りませ
秋燕ジョンブルさんと呼ばれけり
提督の私信の花押露けしや
星月夜明治の暗号美文調

当月集

鈴木 榮子選



○ 荻野嘉代子

懲りず買ふ画展の図録もどり梅雨

赤紙仁王炎ゆれど阿吽乱れなく(東覚寺)

おみくじの吉を確かむ片かげり

楊貴妃も韃陀多もなしはちす咲く

河童忌や田端に旧りし波山の居

○ 松波とよ子

夏なれや歌舞伎の舞台鏡花もの

羅や鏡花魔界の江戸芝居

玉三郎口跡涼し妖婉に

白上布似合ふ女形の愛一途

幻想の異界耽美の扇子揺る

○ 佐渡谷秀一

さるすべり紅く百日は生まれり

無造作に青柿落つる日なりけり

一人旅娘の呉れし日焼止め

立秋や押せば弾みしメロンパン

赤梨や無口なをどこ集まりぬ

○ 生方義紹

ほととぎす最中半個の茶が入る

一画もゆるがせにせず蟻の道

雨意兆す結界越ゆる毛虫かな

止り木の腓返りや夕立あと

晩節を汚すでもなし冷奴

春燈の句

鈴木 榮子選

風鈴や子孫代々頑固者

茨城 君塚 敦二

椅子に凭るブロンズ少女晩夏光

敦忌の禁煙などはする気なし

子の客に家風の茄子を煮たりけり

刈草の匂ふ夕べや夏つばめ

小雀の巢より落ち逝く暑さかな

白粉花や居酒屋に灯のつきし頃

雷鳴に留守居の猫をおもひけり

子を叱る声の漏れくる梅雨の路地

夏の夜の星一つなき帰り道

梅雨深し圧力鍋の吹く蒸気

炎昼や値引きを競ふ商店会

雷神に不意打ちくらふ女坂

佳き人のあふるる笑みや夏料理

托鉢の僧の錫杖梅雨明くる

夏茗荷たつぷりつゆに昼の膳

鬼灯市帰りの酒舗に京の酒

どの家もスローライフや夏見舞

片陰や泣く児のねむり誘ふ刻

税保険引かるる預金夏瘦す

夏雲や山家蕎麦屋の奥座敷

青芒一筋残すけもの道

遠雷や抽出に現れ母の文

青芒青春永久に猛々し

寄贈せし楷の木訪はな梅雨晴間

打ち水で交す挨拶両隣

多摩の丘楷の木かげの涼しかり

育て上げ今宵見送る蛭守

千葉 島田 山流

東京 馬場 宏一

東京 藤田 信義



余言

鈴木 榮子

端居して阿弥陀の便り待ちにけり 呉 文宗

阿弥陀様は極楽世界を主宰するという仏様だ。作者は仏教徒である。心を安らかにし、身を天命に任せて動じない。即ち安心立命の境地である。そして端居なぞして阿弥陀様の便りを待っている—という心境なのだ。

然し中々凡人はそこ迄行かない。病気にでもなれば付和雷同しないが、大袈裟に言えば阿修羅のごとく恐れ戦いてしまっただろう。

今年三月ごろの寒い日、自転車で坂下の霜降銀座へ降りて行こうとすると、母が下から上ってくるではないか、年恰好歩きかた、衿つきの霜降のカーディガン、荷物をリュックに背負って一歩一歩少し体をゆすって私と擦れ違っていた。世の中に三人似た人はいるというが、失意の私に神様が仮の母の姿を見せて下さったのだろうか。一瞬行き過ぎたが振り返るともう15米位先を行かれる後姿を追って追いつき、後からそっと話かけようとしても涙で声にならない。やっと二三

歩自転車を引いて並んで歩きながら、「失礼申し上げ申し訳ございません。あなた様が私の母と余りにも似ていらっしやいましたのでお声をかけてしまいました。」と行ってあとは言葉にならないほど涙が溢れた。

「いいえあなたのお母様なら私なんかよりお若くて……」とおっしゃるのをおしとどめて、「母は亡くなりました。母の方が年上でございます。私が不幸者で母に心配ばかりかけておりました。お呼び止めて申し訳ございません。でも母の面影に引かれて追って来てしまいました」とやっと言った。その方は「失礼いたしました。」と何度もおっしゃるので失礼は私の方でと涙ながらにお別れした。三月この時機一番色々なことが振りかかって来た時に神は私に母の姿を見せて下さったのであろうか。その後この道で、もうその方にお目にかかることはなかった。

今年の盆の送り火に、母は満面の笑みをたたえて帰っていった。祖父母、父母のもとへ行く日、いまだは何時行く日が来ても父母の許へ行くことに不安はない。

羅や鏡花魔界の江戸芝居

松波とよ子

七月大歌舞伎は、泉鏡花作、戌井市郎、坂東玉三郎演出の

昼夜四本が鏡花ものであった。前に「夜叉が池」を観ていた
ので夜の部「山吹」を観た。鏡花戯曲の獨創性の止めに俗界
と魔界との二元的な対立であるが、「山吹」は現代劇である
だけに一層分らなかつた。三島由紀夫がこの作品の上演を熱
望していたということはいかにも由紀夫好みである。途中ま
で分らなかつたがこの様な令夫人は自分を異界に落しめるこ
とで結末をつけるようなサド・マゾ的落魄があるのかと女人
の深淵を思わざるを得なかつた。